
『瘋癲回廊』

吉川楡井

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『瘋癲回廊』

【Nコード】

N3146Q

【作者名】

吉川榆井

【あらすじ】

瘋癲回廊、進めば地獄。

行き着く部屋は鬼の棲み処。男は待合室で女が現れるのを待っている。童宮の佇みを思わせる湯屋の待合室。女を抱くことにおそれなす男の元へ、女が現れる。名は、千鶴子。奇しくも男の母親と、嘗て湯浴みの相手をしてくれた湯女の本名と、同じ名前、千鶴子。

疲れた人間を救済する、魔法装置。それが、瘋癲回廊。

生まれて初めて父親から与えてもらった自室のドアは、所々色褪せていたり、シールの剥がし跡が残っていたり、とても綺麗だとは云えない代物だったが、目の前で鎖された鋼の扉を横に並べたら、同じ事を思うだろうか。

ただただ、鬱々と、朦朧と、煎餅座布団の上に跪いて、その時を待つ。昨夜から下着を代えていないのだが、気に障りはしないか。来る途中、便所に寄った。洩れた尿で、汚れていたりでもしたらどうしようかと不安になっても、自分で嗅いで確かめようとも思わなかった。それは怠惰ではなかった。時間は限られている。集中せねば、と考えた。

何時だか、似たような店に出入りした事があった。川崎の駅に程近い、繁華街の真ん中に、竜宮の御殿を思わせる豪勢で煌びやかな建物があつて、店名もそれを準えたものだった気もするが、定かではない。門を抜け、当時の自分にとっては大金だった一万五千円を、直ぐに失った。受付の男は気味悪いぐらいにこやかで、そこら辺に居そうな、当時の自分と大差ない年齢と思しき風体の男だったが、背は十数糎ほど高く、終始瞰されながら、常連客ついには都会人を装う心持はすっかり萎縮してしまって、生まれつきの訛りだけは漏らさないようにと気を使った挙句に、人見知りの性格を披露する羽目になった。

待合室には十数人の男が長椅子に腰掛けて待っていて、中年男二人の間が空いていたので、気遣いも無く組んだ男の足を跨いで、漸く固い長椅子に落ち着くと、いつ呼ばれるかも気が気で無く、未だ冷静を装いたくて、煙草に火をつけた。卓上にこの店の制約が書かれていた。本番はNG。女の子は傷つきやすいので、乱暴な行為

は云々。煙った室内では男の、今にも暴れだしそんな情感が渦巻いていて、入った瞬間に食傷を味わったものだから、幾ら写真と云えど、女性の下着姿は酷く鮮烈に見えた。受付で渡された小さな切符にはそれぞれ番号が付されていて、自分は〇一三番であった。随分と不吉な数字だと思つて、そう云えばその日もまた十三日の金曜日と云う俗世間的な凶日である事を思い出した。奇遇なんて要らなかつた。用意周到にその日の午前中から電話予約をしていた為か、煙草の半分も吸い切らないうちに、自分の番号が呼ばれた。顔を上げた男たちの視線を背中に浴びて、暗い廊下に出ると、奥に昇降機があつて、薄明かりの中に奇妙な格好をした女の子が待つていた。好みの女だと、安心した。

結局、九十分の時間の内に、恍惚を消費したにも拘らず、見知らぬ女を抱く緊張で、果てる事が出来なかつた。店に入る前、急に催して駅の公衆便所で大便をしたのがいけなかつた。裸になつてそれを思い出したら、途端に気恥ずかしくなつて、実際は歪な形の椅子に座らされた後に、女が丁寧に洗ってくれたのだが、肛門を触れた女の掌の泡が若干茶色くなつていような錯覚さえして、勃つものにもしばし時間がかかると云う醜態を晒した。手錬れの相手でもそんな調子では、一般の女を抱ける訳が無い。

長いこと、女の生きた肌に触れずに過ごした。

怨めしくはなかつた。それが自分の人生だと思ひ込んで、過ごした。夜な夜な魘されて、知らず知らずの内に寝巻きを汚している事が度々あつても、何も恨む事も、怨む事もなく、平々凡々と過ごす。深酒をした夜など、便意を催しても体が動かず、そのまま寝入つてしまふ事があるだろう。それと同じだった。頭と体が切り離されているかの如く、意識と行動が伴わずに、何を愉しみに何を悦びの糧として生きるかも不明確で、早朝六時半に起きて出稼ぎに行き、夜は九時に帰つてきて、粗食をかつ込んで床につく、そんな繰り返しを毎日を送る姿は空蝉だった。

日頃の疲労困憊を惜しんでまで瘋癲回廊にやつて来たのには訳が

ある。肉体よりも精神の方が尋常ではないほどに疲れ切っていた。溜息を吐く度に、肋骨に痛みが走ったり、背骨が軋んだりするのであれば幾らかまじだったのに、蓄積された疲労は鬱となって、心中を闇に鎖したのである。元から耐久性のいい心根ではなかったのだ。酒に溺れようにも酒を飲む金が無い。女で遊ぼうにも相応の魅力が無い。賭博に嵌ろうとしても伝手が無く、人生に見切りをつけようにも度胸が無い。何かを欲して、町に繰り出してみれば街頭インタビューが席卷していて、危うく撮影される。地元のテレビ局だろうが、大した話題も無いのに町に出てきては、撮影を繰り返している。自分の姿がブラウン管を通して、晒し者になる。考えただけで頭が混沌となり、画面に見切れる事すら避けたかった。

瘋癲回廊はそんな心の澱みや恨み辛みを癒してくれるのだと何処かで聞いた。瘋癲回廊とは俗称で、実際は異なった名称がついているらしいのだが、知らぬままにやって来た。金は無い。担保も無い。そんな自分でも願えば辿り着けると云う不思議な湯屋だと聞いて、充てなく彷徨った三日の内に、いよいよその門を見つけた。どうだろう、決してそんなはずはないのに、何時ぞや一度だけ世話になった湯屋の佇みが其処に見えた。御殿は、夜の底に沈んで一層煌々と存在感を発しながら、門を大きく開けて自分を待っていた。分厚い扉の陰から何やら金切り声が聞こえてきて、ふっと覗いて見ると、髪が灰色にくすんだ初老の男を二人の従業員が担いで店内に連れ込もうとしている。灰色の男は随分と荒々しく気を狂わせていて、もがきながら、従業員の腕を振り払おうと躍起になっている。ぎつちり噛んだ歯の隙間から病的な悲鳴を発していて、どうやら店を抜け出して扉を乗り越えようとしていたようだ。ぼんやりと、店内に消えていく三人を見ていると、その向こうにまた別の男が蹲っているのが見えた。顔を上げて、通りの方に、つまりは自分に向かって、にやりと卑しげに笑んで、彼もまた従業員に肩を捕まれ、店内に消えて行った。

癒しも刺戟なのだと云う。奈落まで落ち込んだ人間の疲労を快復

させるには、それ相応の荒療治が必要との事らしい。却つて悪化させる事もある。落ち込んだ意気が、格別な癒しで強引に持ち出され、狂気の果てにまで行き着いてしまうのだ。あの二人はその典型なだろう。女との相性が悪かったのか、行為の取捨選択を失敗したのか、あるいは元より狂っていたのか。本心では癒しすら拒んでいる、手遅れの……。少し、身震いをした。自分はどうかだろう。本当に癒しを求めているのだろうか。並大抵の虚無を感じただけでは、瘋癲回廊を欲する処に行き着く訳が無い。そこまで落ちぶれてしまったのか。本当は来るつもりなどこれっぽちも無かったのではないか。だとしたら、自分もあの男たちのように気が触れてしまわぬだろうか。瘋癲回廊が金を取らないのは、客の欲求だけを物差しにしているからだと云う。もしそれが本心からでなく、一抹の欲情や、咄嗟の思いつきであったならば、逆行行為になり兼ねようが店の知った事ではない。一度、入ってしまったからには、治癒の恩恵を受けて出てくるか、狂気のまま葬られるか、それを決めるのは客である自分の心持次第なのだ。

受付は済ませたようだ。最早、朦朧は極致に達し、短期の記憶も定かではない。癒される、その目的だけを動力源とした生ける屍となって、狭い個室に進んでから、己が数々の疑問を擲つて、店に入ってしまったのだと気がついた。個室には染みの浮いた四畳半の畳の上に煎餅座布団が一枚きり敷いてあつて、机も何も無い。天井から吊り下げられた裸電球と、小さな窓が一つだけ天井近くの壁の高いとところにはぼかりと開いているだけだった。もちろん、先客はいない。待合室は個別なのだ。他の客とは最低限顔を合わせない。静けさの中に、女の声の幻聴が聞こえる。いつか訪れた湯屋の女は、こちらがそれほど上手に愛撫しなくても、半ば気持ちも引き潮にさせてしまう程に、本能を掻きたてる喘ぎ声を聞かせてくれた。それを悦ぶ男も少なからず居るに違いない。しかし、総べてではないのだ。少なからず自分は違っていた。その喘ぎが嘲りにも聞こえてきて、思わず乳房から手を外して、掌で思いつきり女の口を塞いだ。籠っ

た女の声は少し官能的になつて、満ちていた動揺は発散して、室内にばあつと安堵が解放された。それでも果てる事が出来なかつたのだから、自分の鈍さを呪うしかない。思えば、彼女が此れまでの人生で最初に抱いた女であろうから、偽りといえど不摂生な自分を慰めてくれた女には違いなかつた。ポイラー室から噴き上がった大火で、店そのものが全焼し、別室で仮眠をとっていたその女を含む、従業員七名が焼け死んだのはそれから三年後だつただろうか。何故報道でその女が死んだのだと知れたのは、偶々入浴の合間に、女の名前が自分の母親と同じだと云う話題で盛り上がったからだ。もしかすると、それも業務の偽りに過ぎぬと云う疑念もあつたが、報道された死亡者の中に、千鶴子と云う女が居て、年齢から見てもあの女に違いなかつたのである。年頃にしては古めかしい名前だと思つたのだが、女は気に入っていると笑つた。まるで自分の母親をも善く言つてくれている気がして、忽ち気に入つたのだが、九十分の間、嬉しく感じたのはその時だけだつた。それ以外は千鶴子と云う女ではなく、めぐと云う源氏名の、空っぽな女しか、あの部屋には存在していなかつたのである。

色情の記憶はそれ以外に無い。最初に抱いた女はもう此の世には居ない。何度か、その後も試そうとしたが、矢張り体が動かなかつた。いざ、女の体を目の前にすると、身も心も萎縮してしまつて、逃げ出すきり無かつた。癒しが必要なのではないかと教えてくれたのは父だつた。父とは別居していたが、月に一度、自分の部屋を訪れては、自らの云いたい事を云つて帰るのが御決まりだつた。あの日も朝十時ごろに来て、運悪く非番だつた自分は、建てつけも素材も古い部屋の戸を轟かせて上がりこんできた父に叩き起こされた。部屋に上がってくるなり、買い物袋ばんばんに膨らませた食材をどかつと流しの上に置いて、怒号を放つた。心地よい目覚めではなかつた。布団に顔を隠して寝た振りを続けたものの、父の手によつて丸裸にされ、何より寒さに驚いた。部屋の掃除ぐらいしると叱りつける父を無視して背伸びをすると、寝違えたらしく首が凝り固まっ

ているのに気付いて、暫く起き上がれずにいた。首が痛くて起きれないのだと云うと、「母親そっくりだな」と思いつきり太腿を蹴られた。

「首が痛いだの、頭が痛いだの、言い訳ばかりぬかしやがって。お前の母親もそうやって何でも俺にさせたがった。ったく、穢れた遺伝だな」

吐き棄てて、父は背を向けた。

「こんな生活続けてお前は自分が不幸だと思わないのか。ちつとはましに生きてみようと思わないのか」そう独りごちながら、父は流しの上の袋を漁っている。

「どうしてもやる気が起きないなら、そりゃ病気だ。治療してもらったらどうだ」

アア、そうか。その手があつたかと素直に思った。自分は病気なのだから、治してもらえばいいのだと、父の言葉で気がついた。でも、どうすればいい。何処に行けばいい。癒してもらえる場所は何処だ。医者では難しい。アア、矢張り自分を癒してくれるのは女しか居ない。女の居るところにしよう。でも、ただの女では駄目だ。ただの飲み屋や湯屋ではいけない。金も掛かるし、成果も無い。何処か無いか。自分を癒してくれる湯屋は、女は。そこで思い出したのは、竜宮の構えを持つ店で、但し一度行った湯屋ではなく、夢景の城であった。門の奥に坐していて、今こそ裸体を曝け出し、此方に手を伸ばして、抱き寄せ、豊満な胸に吸いつかせてくれる慈愛と官能の権化、乙姫の姿であった。その時、自分はまだ瘋癲回廊の存在も何も知らなかったから、すべては夢見の光景であるのだとばかり思った。それよりも目の前に在る父の背中が、竜宮の輝かしきヴィジョンとは反対に、哀れなほどくすんで見え、父の背を通して襲ってきた虚無で、夢景も泡沫に帰した。

風の噂で、瘋癲回廊を知ったのは、そのすぐ後だ。

何処で聞いたのかはあやふやで、もしかしたら他人に教えられたのではないのかもしれない。教わる前に、遭遇してしまったに過ぎ

ないのかもしれない。だが、入り込む事は出来なかった。昨夜見た夢は鮮明に覚えているのに、不可思議極まりない。

唯、如何なる夢景も、此の広い世界の何処かに存在し得るのだと確信した。存在を信じるだけで、力が漲った。いけない。元気になれば瘋癲回廊は遠ざかる。心の底から癒しを求めなければ、瘋癲回廊とは回り逢えぬのだ。然ういう風に己に言い聞かせて、自分を奈落の底に落とし込む日々が続いた。宅配業者の倉庫で、行き先別にダンボールを仕分ける仕事に就いていたのだが、態と場所を間違えたり、態と物品を紛失させたり、画策してみた。すると、直ぐに職を失い、古着を屑籠のカバーや雑巾に仕立て上げる裁縫に携わった。どんだん事態は悪くなる一方、思わぬ事に気がついた。如何ほどに失敗を重ね叱責を受けても、自分の心には生きるための防衛本能が備わっていて、隅に追いやられれば追いやられるほど、瘋癲回廊の夢を見ては、夜伽の内に元氣付けている自分がいる。そのせいで、苦しいはずの生活にも、大方満足してしまっているのだ。自慰に耽るのに慣れてしまい、何も変わらぬまま、本来の目的も忘れ、ただの出来損ないとして生きていこうとしていた。此れではいけないと思ひ直して、さも人が変わったかの如く仕事は熱心に取り組んだ。褒められ、それまでの素行が悪しきものだったから余計に、人間的に成長したのだと讃えられた。嬉しい事だった。嬉しい事に違いは無いのに、心は満足していない。常闇が其処に在り続けた。晦冥は、生活が順風満帆に行けば行くほど広がっていき、やがては労働人形のように齷齪と働く一方で、自我を失い、心を漆黒に染めつつあった。自らの心が震えているのが分かる。表には出て来ず、自分にか分からない痙攣じみた震えだった。

翳と冥暗が全身をくまなく包み込み、もう染め上げるものがないと云う域に達すると、恩恵が遂に手元にやって来た。魔法を使つて顕現させたと思ひような無い、焼け失われた何時ぞやの湯屋に似た竜宮の御殿を、近所に見つけたのだ。門を潜り目の前に現れたのは、先ず長い廊下。受付を済ませて長い廊下を歩くのだが、歩い

ている心地が全くしない。従業員は途中で別れ、黒く長い髪の女が一枚目の扉の傍で迎えてくれた。「あら、随分若いのね。珍しい」女に手を握られる。髪がふわりと真つ暗がりになった。焼死した女めぐは髪を脱色していて、くねくねと海草のように畝った髪を頭の頂に乗せてピンで留め、所謂盛った状態だった。戯れつつ、ピンを抜き取るうと此方が腕を伸ばしたら、めぐはその手首を掴み、すごく冷やかな目で、外さないでと云った。直すの大変だからと云い、次の予約が既に入っているのだと、自分が体を許すのはお前だけでは無いのだと、その瞳が教えてくれた。憤りを憶える自分も、それを表白出来ない自分も情けなく感じた。彼女たちは恋人では無い。妻でも、妾でもない。仕事なのだ。今で云えば自分がダンボールを仕分けるのと同じように、がたの来ているミシンで雑巾を縫うのと同じように、彼女たちにとって自分は仕事の相手であり、道具であり、金蔓であり、それ以外の何者でも無いのだ。反抗心からか、一方で、自分はお前のような女を抱きたかった訳ではないと怒鳴りつけたくもあつた。初めに目をつけたのは別の湯女だったのである。予約した時間の一時間前に体調不良で目当ての女が出られないと連絡が入って、渋々同じ時間に出られる他の女を紹介してもらつた。めぐは、その紹介された女に過ぎなかつた。一目見たとき、好みの女だと悦んだが、思い返せば、どんな女が来ても自分は好みだと思つたに違いない。選べるほど女を知らなかつたのだし、そもそも女であれば何でも良かったのかもしれない。

だからこそ、瘋癲回廊で出迎えてくれた垂髪の女も、一目見て、好みだと思つたのだ。

そうして今もまた、例の女を待っている。煎餅座布団に胡坐をかいているのも疲れてきて、寝そべってみた。天井は高い。清掃するのも難儀だろう。隅っこに蜘蛛の巣が張って、残っていた。宿り主の居ない鼠色の紙縊りがふよふよと揺れていた。

扉が叩かれて、従業員の男が顔を出した。他の湯屋とは違って、

此処の男は愛想が悪い。不躰に、出る、と云われて、飛び起きて室外に出た。長い廊下が百米ほど続いていた。その間、先ほどまで分がいた個室の扉以外、壁には何も無い。照明もなく、只管女の待つ一枚目の扉まで、秩序たる薄闇の歩廊が続いていた。

女の姿が見えた。アア、と胸を衝かれる気がしたきり、女に目を合わせる事が出来なくなつた。扉の前で従業員の男が立ち止まつた。「さあ、行きましょう」

女の声。

扉が開かれて、その先もまた闇。女に手を握られて、愈々、瘋癲回廊に足を踏み入れる。

更に濃度の濃い闇だった。男女二人、手を繋ぎながら、暗がりに入つていくその様はオバケヤシキに踏み込む恋人同士のようなもある。足元は若干後ろに傾いていた。二人、肩を並べれば直ぐに窮屈に感じる幅で、廊下と云うより坑道や隧道にも近い。

「こんばんは。佐藤太郎さん」

姓名を呼ばれた。日頃、姓名を聞かれると、有り触れた名前だろうと答えるようにしていた。それが自分なりの挨拶だった。だが、此方が返事をする間もなく、また此処に来たの、と重ねて女は訊いてきた。どうやら複数回訪れる客は珍しいらしい。確かにそうだ。二度来ると云う事は、二度も奈落の底に落ちたと云う事で、普通忌避すべき事なのだろうから。

「でも、居ない訳ではないわ。来る人は来る。二度も三度も。でも、三度が限界ね。貴方もそろそろお止めになつて」

あんまり此処に通うと発狂してしまいますよ。

脳裏に店の外に逃げ出した二人の男の姿が浮かんだ。彼らも、二度三度、訪れた客なのだろうか。

「若い方は若気の至りと云う事で良いのでしょうか、御年を召してからじゃあねえ」

女の艶々した笑顔は、切なそうにも見える。以前、来た時と何も

変わっていないからか、懐かしい。初恋の気分だ。

「ご老体を惜しんでまで来る場所ではないのに」

映像作品でなら観た事がある。若い女優と髪の抜けた老人が性交をする企画物だ。振り返れば、めぐの居た店でも、待合室は年配客が大半だった。目の前の女が、老けた男たちと貪り合う画が頭に流れる。それは若い自分にとって聖域を侵されるに値し、想像するだけで吐き気や怒りが湧き立ったものであったのに、今となっては彼らの気持ちも理解できない事もない。男はいつだって女に慰めてもらい、己の性欲に慰めてもらいたいのだ。たとえ羞恥の極みでも、女を抱くと云う行為が男を男たらしめる。今の自分を見よ。此の歳にもなつて悠々と女を抱けずに、二度も落ちぶれてしまったのだ。

慰めてくれるのは自慰か湯女ばかり、それも湯女を前にしたって男を廃らせる事しか出来ないのだから、余所の男たちをどうして悪く云えよう。云うだけ自暴自棄になるのが山だ。自分も余所の男たちと同じどころか、数段にも増して愚かな男なのだ。

「調子はいかが」

調子がいいと思つた事は無い。身も心も疲れ切つて、出てくるのは鬱と僻みばかり。再起不能とは此の事だ。

「かなり溜まつていらつしやるようね」

女の鼻先から、むふんと風が洩れた。此の女は不思議だった。他の女に云われれば憤怒しそうになる物事も、此の女の口から発せられれば、つい受け入れる気になつてしまふ。声質も善い影響を及ぼすのか、言葉の端々に妙な優しさが垣間見えるのだった。なかなか居ない女だと思つて、つい興味が出てしまふ。

「もう少し我慢してくださいな。廊下はまだまだ続きますよ」

瘋癲回廊と称す上に、この殺風景な暗黒の象徴ならぬ、小腸、とも呼べる、長い廊下のせいで、事は此の廊下に始まり此の廊下に終わると思われるかもしれないが、実はそうではない。きちんと最後に行き着く部屋がある。湯浴み場である。湯浴み場に着く前に、女

の体を誑かす事は禁じられている。若し破れば、如何なる処罰が待ちうけているかなぞ、知る由もないが、到底そんな暴挙に出る勇氣は無い。湯浴み場までは暗く長い廊下が時に屈折し、時に蛇行し、奥へ奥へと伸びている。一見こんな複雑で長大な廊下が、ひとつの建物の中に入り込んでいるとは思えぬほどの造りであった。先に潜った扉を一枚目、と呼んだのにも理由がある。湯浴み場に行き着くまでに客人は数枚の扉を潜る事になる。それを決めるのは導き手である、女の思惑のみだった。つまり、気に食わぬ客が来れば、女は小手先一つで客を永劫に拡がる歩行地獄に連れて行く事だつて可能であり、痺れを切らして己に手を出させようと意図的に仕向ける事も可能なのだ。女に嫌われたら一卷の終わり、瘋癲回廊から抜け出せずに、生きる事も死ぬ事も出来ずに彷徨い続ける。

瘋癲回廊、進めば地獄。行き着く部屋は鬼の棲み処。

まるで怪談を愉しむように、女が謡った。だが、安心出来ない事も無い。一度入れれば分かる。鬼は客人が選んだ結末により、変わる自分こそが鬼と化したり、女だったり、或いは二人とは別に鬼が待つ事もある。此処で云うところの、鬼、とは何も角を生やして獣皮を履いた御伽噺のそれではない。見た目では人のまま何も変わらぬだろう。鬼は、招かれた客にのみこそ見える、狂気の沙汰なのだ。

と面白半分に云われている。

瘋癲回廊と云う胡散臭い呼び名は、客が愛着を持って呼び始めたり、店側が一種の戦略でもって自称しているのではない。発端は女だ。客が他に居ると云う事は無論、女も他に居ると云う事であるが、彼女たちは云わば同僚であり、訪れる男たちを介抱し、慰め、或る時は性的嗜好の前提の上に、酷い罵詈雑言を浴びせかけては、奈落に落ちた自分のような男の救済を生業としている訳だ。瘋癲回廊とは彼女たちが独自に用いる隠語であった。

鬼が棲む、と云うのも、彼女たちの内の誰かが面白がつて創作した謂れであり、単に果ての湯浴み場で待つのは、快樂と治癒か、虚無と破滅かのどちらか両極端だった。それを鬼と名付けた何処かの

女の発想には舌を巻いても、決して巧いとは云えない。瘋癲回廊はオバケヤシキではないのだ。恐怖を愉しみに来る者など居ない。快樂を愉しみに来る者も居る事は居るだろうが、矢張り大体が求めるのは、癒しである。

隣の女が云うに、癒しもまた過剰な刺戟である。ある種の感情麻薬でもあると云う。確かに癒しとは心を惹きつけ、如何なる下世話な欲情よりも、優しい欲求だ。癒されたいと思う気持ち次第に己を癒していく、それは身内から出た毒素で自らも体を麻痺させる毒蛇を髣髴とさせる、持主をも浸蝕する毒の性質も重なり合う。一度嵌れば辞められない、刺戟。それがごくごく一般的な店で得られる分には、至上の幸福だろう。だが自分たちのような者は違う。自分のような恵まれない者たちは、それを得る時も悪夢と背中をびたりとくっつけておらねばならぬのだ。一瞬でも道を見誤れば、穢れた衝動を抑止する手元が緩んで、忽ち悪夢に引きずり込まれる。瘋癲回廊 言い得て妙。まさしく此処に來れば、己の瘋癲としての器が試されるのである。瘋癲か、否か。天国を見るに値するか、地獄を見るに値するか。無論、瘋癲は地獄である。

そんな事を得意げになって、女に話すと、くすりと口元を押さえ、て女は笑った。

「あはやだ。想像力が豊かだこと。そんな物騒なものではございませんよ。瘋癲回廊と云う名は、この曲がりくねった廊下を揶揄するためのものでしょう。実はこの廊下、歪な螺旋状になっているのです。だから、進めば進むほど目が回る。眩暈の果てに瘋癲の兆しが見えて危なっかしいわあ、とそう云う話です。もちろん、実際に気を触れるお客さんもいらっしやいますから、何とも云えないんですけど」

此の女こそ、瘋癲だ。目の焦点が合っていない。否、女の瞳がぶれて見えるのは、自分の瞳孔が開いてきた証拠なのか。

「あんまり気を抜いては、足元が拗れて転んでしまいますよ。一度、転べば、立つと云う感覚さえ失って、後は下に転げ落ちるのみ」

女が立ち止まって、後ろを振り返った。

其処にはぼつかりと穴が開いていた。仄暗い穴が開き、今まで平坦に進んでいるのだとばかり思った廊下の床板が、鋭く斜めに下がっている。随分急な傾斜だった。確かに転がって落ちていつてしまいそうだ。女の手を改めて強く握る。

「あんまり強くしたら痛いです。大丈夫、転ばせはしません。湯浴み場に急ぎましょう。だから着いてきてくださいな」

足が疲れて来た。普段、特に此れといった運動もしていない為か、脹脛がぱんぱんに膨れ、筋も凝ってしまつて、歩く感覚も薄らいでいく。女の手一つだけで、頼れる自分の図体を支えきれぬだろうか。細い腕である。昏黒に切込みを入れる白月の射光のような腕だ。そうと知りながらも、必死でしがみ付いた。自分の体力が思いの他、削られているのが分かつた。二度目となると場所の勝手も分かるから意気揚々と過ごせるだろうと思つていれば、そう容易くも行かない。元より体力は無かつた。旅館で板前見習いをしていた時、社員旅行で下北半島に行き恐山に上つた。登山で疲れ果て、地元に帰つてきて直ぐに肺炎に罹つた。旅館の仕事も辞めざるを得なかつた。あの時の苦しみと熱さを思い出して、喉が渴いた。

「もうじき二枚目の扉が視えてきますわ。がんばつてくださいな。水も飲めます」

「アア、と云う嘆息しか出て来なかつた。肯いたつもりである。掌が汗ばんでいた。」

「ほつら、視えてきました」

確かに薄暗がりの中腹に、ぼんやりと二枚板の茶色い扉が視えて来た。

「幻ではございませんよ。サア、行きましょう」

「せめてこの先抜ける扉は二枚にしておくれ。女に願つと、此奴、此の期に及んで聞かぬ振りをした。女の後ろ髪を掴んで引っ張つて

やろうかとも思ったが、既のところでは衝動を抑えた。女の機嫌を損ねてはいけない。神経を逆撫ではいけない。金も要らぬ、そして何より、瘋癲回廊では時間の制限がないのだ。何処ぞの店のように六十分だの九十分だの区分がない。客が望む分だけ、女と寄り添っていられるのだ。長い廊下はその代償として体力を奪うためならば、画期的な妙策なのであろう。体力を失えば、客も入り浸る事なく行為を済ませて直ぐ帰る。鬼道に通ずと吐かしながらも、趣向に趣向を重ね、戦略の練りに練られた施設なのであった。

床板を踏みしめる足音だけが、冷たい闇の中で鳴る。

時間の制限がない、と云う事はつまり、此の廊下にも、後の湯浴み場にも時計は無いと云う事である。ふと思えば、今がいつ何時で訪れてからどれ程の時間が経過したのか判断出来なくなっていた。つい先ほど訪れたようにも感じるし、気の遠くなるほど以前から瘋癲回廊を彷徨っていた気もする。

女に聞いても、気にするなと云われる。確かに時間を気にして喚くのは身勝手な事であった。時計がないのは客の為である。時間を忘れる為にと云う店側の配慮だ。しかしその浅はかな小細工が益々盲を深くさせた。自分は既に此の世ならぬ幽冥の奥地に潜り込んでとうに現実へと繋がる道を見失っているのではないか。手を引く女は、それをも知りつつ、自分を彼岸まで連れて行く気なのではないかと。

「サア、背筋を伸ばして。しゃんとして。扉を抜けますわよ」

気付かぬうちに二枚目の扉に辿り着いていた。一時、女は握った手を離し、二枚板のノブを掴んで、奥床しく開けた。紅い光と蒼い光が目に入った。眩く、暗がり慣れた眼が焼き焦げそうな照明だった。思わず腕を翳して光を遮ると、此れまた長い廊下が続いている。通ってきた廊下と幅も高さも変わらぬ細い道である。しかし、ブイイーンと装置の起動音がして、床が向こうに走っていくのが分かった。

「乗るときにだけ気をつけて。此処から先は歩かずに済みますから」

アア、そうだった。そうだった。息を切らせて歩かねばならぬのは一枚目の扉を抜けた、暗闇の斜面道だけだったのだ。二枚目からは此のベルトコンベアーだ。うんうん、宅配業者の倉庫で働いていた頃を思い出す。此のように荷物が流れてきて、それを受け止めて仕分けするのだ。

「ちよつとお待ち下さいな」

女が背を向けた。扉を抜けて直ぐ傍らに、造花に囲まれた小滝が壁に埋もれていた。小滝の波に手を浸し、彼女は手の腕で水を掬う。何をするかと見守っていれば、水を汲んだ掌に己の口を吸い寄せ、細顎の口に水を含んだ。そうして、再び此方に振り向くと、濡れた手で頬をばしつと捕まえられ、口移しで水を飲まされた。俄かに温くなった水と一緒に、蠢く舌が唇を押し開けて入ってきた。唇の端から水が伝って、喉仏の上を流れた。女は律儀に唇の上から順になぞるように舐め取って行き、喉仏に接吻をした。

「二度目ですから、御奉仕を」

囁き声でそう云った。其処で初めて女と視線を交わしたのである。アア、貴女はそのような格好をしていらしたのですか。ぱくぱくと唇を動かしていると、不思議そうな目つきで女は首を傾げた。女はバスローブしか着ていなかった。両側を結んだ紐が解けそうになつていて、胸元ははだけていた。此方の視線が注がれる先に気がつく。と、女のぱちりとした目は、気恥ずかしそうに歪んで、女は手ではだけた部分を直した。

「さあ、先へ」

アア。そうだね、喉もすっかり潤ったことだし。

右の壁は蒼く、左の壁は紅い。と思ったのは、照明のせい、壁そのものに色が塗られている訳ではなかった。そう云えば以前来た時もこんな道を通った覚えがある、かもしれない。記憶が不鮮明なのは変わりない。以前は、湯浴み場に着いて、布団に横たわる女の姿に、いつかの挫折を思い出して、愛撫も何もせぬまま飛び出した。それなら明瞭と憶えているのに、其処に行き着くまでの記憶が無か

った。本当に自分は此処に来た事があるのだろうか。

「もう御見知りおきでしょうけれど、一応御説明させて下さいな。

此の回廊は御客様自身に眠る数々の夢や欲望を映す装置でございます。御客様は此れより時間をかけて、ゆっくり御自身に眠る真の欲望を引き出して頂き、それから湯浴み場へ参ります。御自身と向き合い、御客様の欲する行為で締めくくる事により、奥深い癒しの世界を体験して頂きましょう。御客様に因っては、行き着く迄に数日掛かる場合もございますし、或いはものの十数分で湯浴み場に到着する方も居られます。但し早く行き着けば善いものではございません。じっくり時間をかけて、窓辺に視線を傾ければ、尚わたくしとの絡みも極楽でありましょう。上つ面ばかりの快樂で宜しければ、それでいいのですが、此の長い廊下は、瘋癲回廊とも呼ばれておりまして、瘋癲回廊、鬼道に通ず。或いは、瘋癲回廊、進めば地獄。行き着く部屋は鬼の棲み処とも謳われます。鬼の餌食になるか、獄卒の玩具になるか、癒しの恩恵を受け元の生活に戻るかは御客様次第。今晚、御相手を務めさせて頂きます、わたくし……千鶴子と申します」

オオ、千鶴子が良い名だ。思わず拍手をした。千鶴子、はて何処かで聞いた名前だと思ふ。オオ、そういえば母親と同じ名だ。アア、此れは愉快。まさか名字は浦嶋と云うのではなからうな。そうであれば益々愉快。奇遇か、必然か。千鶴子と云う名の女に悪い女は居ない。すっかり気を許して、女の差し出した手を再び握る。

「先ずこの紅蓮と蒼穹の間、居心地は如何でございます。左は大地、右は天空を準えていて、上下と左右が傾いているような気分にはなりませんか」

アア、確かにそうだ。普段、蒼穹は真上にあると云うのに、此処では真横にある。まるで自分が横這いになって地面と並行に歩いているような心地。愉快愉快。

「それでは歩廊に乗って下さいな」

ベルトコンベアーに乗る。疲れた足をじたばたと動かして、歩く

必要がない。此れは誠に嬉しきことよ。

「滑る歩廊が、此の先御客様を乗せて、湯浴み場へ連れて参ります。気分の悪くなられた方は、どうぞ右手に非常口がございますので、其処から脱出を」

蒼穹の途中に背の低い扉が一枚あった。成る程、外界と通じるのは此の扉一枚か。

「左手の大地の一角を御覧ください。窓が見えてきましたでしょう。大地の途中から長方形の大きな窓が現れた。コンベアーががくんと停止した。窓の向こうに本棚が見えた。何だ、此処は書庫まで完備されているのかと思えば、ひとりの男が本棚から文庫本を引き抜く画に切り替わった。

「此の男、大の本好きで、週に一度はこうして本を漁りに来るのです。ほら、見てください。手元を。三、四……七冊ほど買うつもりなのです。此の男、平日はしがないゴミ収集の作業員なのです。仕事中、捨てられた本まで拾って帰るのです。実家暮らしなのですが、与えられた部屋は四畳半の狭苦しい部屋。そこには溢れんばかりの本、本、本。母親も呆れています。せめて古本で済ませれば、と助言しても、立て板に水、暖簾に腕押し。欲しいものを買うのだ、古本屋には欲しいものが無い、と言い放って、今日もこうして買いに来ていると云う訳です。品定めが終わったようですね。ホラ、レジに向かいます。よおく、見ていて下さい。店員が居りますでしょう。歳は十八。まだ高校を卒業したばかりの学生です。本当は大学に行きたかったのですよ。でも、資金のあてがなく、仕方なく就職を選んだのです。そうそう、此の不況の世の中に。五、六件、面接を受けて、漸く書店で働けるようになったのです。ですが、まだ入って一ヶ月目。なのに、もう一人でレジを任されている、何とも優秀な女子だと思いでしょう。イイエ、違うのです。あのカウンターの脇、目つきの鋭い年配の女が睨みつけているでしょう。あれが指導係なのです。あの女の指導は、厳しいことで有名でして、若い子が入ってきてもすぐに辞めてしまうのです。だから、あの若い子はそ

の穴埋めで雇ってもらえたのでしょうか。エ？ 何故、指導係を辞めさせないのかって。それは無理です。あの指導係は、店主の妾なのですよ。幸い、売り上げにはさほど響きませんし、店主も見知らぬ振りをしております。それはそうと、もうすぐですよ。まず男が金を支払いましたでしょう。本の量が量だけに大きめの袋にしか入りません。もたもたしておりますねえ。男の方は黙ってそれを見ておりますわ。重ねて入れるには三冊ずつ横に並べて六冊だったら収まりもいいのに、残り一冊がどうも入らない。仕方なく、六冊の上に置いて、袋を閉めようと……ホラッ、落とした。足元に落としてしまいましたわ。文庫の帯が弾みで外れて、背表紙が歪んでしまいました。アララ、どうするのでしょうか。すいませんと蚊の鳴くような声で謝りました。いけません、それでは男には聞こえないでしょう。何もなかったかのように袋にしまっ店主を、男の方は黙って見ております。表情ひとつ変えません。袋を受け取るまで、眉根ひとつ動かしません。男はレジを去っていきました。ほっと一息ですね。また別の客が来たので、本を受け取ります。ところが、見てください。男が戻ってきました。手には、あの文庫本がすっかり。他の客を押しつけて彼女を呼びつけます。耳を澄ましてください。本に落ちた後が残ってる。新しいのと交換してこい。アラマア、怒り心頭です。でも声は平坦で、怒ってるように見えませんね。あくまで紳士的な態度です。店員が文庫本を持ちながら何やら困惑しているようです。出版社ごとの配置は憶えたはずですが、どうやら飛んでしまったようですね。恐る恐る男に何処に置いてあったか聞いています。逆鱗に触れるのも無理はないでしょうに。ところが、売り場にはそれ一冊しかありませんでした。在庫があるかもしれないね。彼女は駆け出します。レジはどうしたのでしょうか。嗚呼良かった。指導係が対応しています。倉庫にも無いようですよ。男が近付いていききました。無いの、じゃあ、どうすんの。申し訳ございません。お前が落としたんだろ。すいません。可哀相に、頭を下げて。アッ。男の手が。きゃっ。いやっ、やめてください。何たる外道のする事

でしょうか。服の下に手を差し込んで……あれはもう下着の中に入れて手を突っ込んでおりますわ。拒否する女の手を押さえつけて、ア、悲鳴を上げようとする女の口に強引に接吻をして、ア、誰か誰か気付けて。ア、ア、倉庫の奥に引きずられて、ア、スカートが。返品すればいいだけなのに。なんて鬼畜な。声出したら殺す。店内放送が、彼女の名前を呼んでいます。そうでなくても人手の足りない時間帯。倉庫にまで見てくる余裕がないようで、か弱き乙女は男に犯されて、ア、ア、アッ。……何たる事を。男は倉庫の鍵を開けて出て行きました。倉庫の床で寝そべったまま、女はびたりとも動きません。出されたのです、中に。見てください。女のスカートの奥。パンツが引きちぎられて、あんな強引に……。胸から出血しておりますでしょう。噛んだのです。男が、絶頂の時に乳首を噛んで傷付けたのです。そして、見てください。女の口。文庫本が丸められて……」

もうやめてくれ。そういうのは好きじゃない。

倉庫で男の手が女の胸を弄った辺りから、目を逸らしていた。何を悦んで、女が犯される映像に発情しようものか。あんなに若い女を。

窓が暗転した。

「お嫌いですか。続きがございますのに」

首を横に振る。大方予想はつく。孕むのか、あの少女は。そう問うと、千鶴子はエエと答えた。

「孕んだ事を知ったその日に、彼女は死にました。自宅の浴槽で血の海に浸かって。手首を、切ったのです。けれども浴槽に流れた血は手首のものではありません。股から噴出した血でした。血に埋もれて、胎盤と胎芽が排水栓に引っかかっておりました。自死した反応で、流れたのです」

それを映像で見せるつもりだったのか。

「イイエ。まさか。男の方は捕まりました。すぐに。まあ監視カメラの映像にはつきりと顔が残っておりましたからね。婦女暴行で逮

捕されました」

「気の毒な話だ。何のつもりだ。こんなでまかせの映像を見せて、何が癒し、だ。」

「でまかせではございません。実話です。本当に起こった事なので」

自分には関係のない話だろう。

「実を云えば、此処では客人の嗜好に合わせた映像を流す事になっていたのです。今のは強姦物を好む客人の為のものでした。御客様の嗜好に合っているかと。装置が間違えたのかもしれない。貴方の嗜好を此方で勝手に勘違いしたのです。申し訳ございません」

千鶴子は頭を下げた。先ほどの画が浮かぶ。犯した男もこんな気持ちだったのだろうか。確かに目の前の女を今すぐに壊してしまいたい衝動に駆られた。そうすれば、どれだけすっきりとするだろう。アア、謝る事は無い。驚いただけだ。顔を上げなさい。

彼女は顔を上げると、いきなり抱きついてきて、優しいのね、と耳元で囁いた。女の唇が耳朵に当たって、吐息で湿る。何、普通の事じゃないか。あの男とは違う。千鶴子の肩を抱きながら囁き返すと、胸を此方の胸板に押し付けて、発情しているのだと乳房の感触で示しながら、身を擦った。それは制約違反ではないのか。

千鶴子は云った。

「わたくしが赦します。今回ばかりは」

アア、有難う。お前こそ優しい。

「先へ行きましょう。もう機嫌を損なわせたりは致しませんので」
離れた千鶴子の胸元ははだけていた。何だ、下着を着けていたのか。千鶴子の乳房は、紫色の下着で覆われていた。肉の谷間に目を瞠る。

「後で、脱ぎますわ」

そう云って、差し伸べた千鶴子の手を、握る。コンベアーが動き出した。

紅と蒼の照明にもいい加減疲れてきて、その上、人の気持ちを踏み躪る映像まで見せられたものだから、幾ら千鶴子の胸の感触を味わおうとも、げんなりした気持ちは尾を引いていたのである。次の扉が見えて、もういつそのこと、自分は一度此処に訪れた時に前段を踏んでいるのだから、さっさと湯浴み場に連れて行って欲しいと思った。だが、千鶴子には口に出して云えなかった。何故だろう。怖いかもしれない。湯浴み場に着いて、千鶴子を抱こうとしても再び何も出来ぬまま逃げ出すのではないか。そんな懼れがあった。先ほどの強姦魔のように、即座に勃たせて、濡れてもいない女の子宮に差し込んで絶頂に果てる事が、到底自分には出来なさそうに思えたのだ。

「何故、貴方はそういつも考え事をしているの」

ハテ、そんな顔していたか。ふと目の前を見れば、一枚の鎖された襖があった。

「三枚目に着きましたよ」

アア、そうか。気がつかなかった。何もお前の事を忘れていた訳じゃないのだ。繕ってみたが、千鶴子の狐疑たる眉は戻らなかった。いけない。自分の機嫌が損ねるのは良しとして、千鶴子の機嫌が損ねるのはいけない。せつかく再び逢えたのだから。せつかく、再び瘋癲回廊にやって来られたのだから。気を引き締めて行かねば。

千鶴子が襖を引いた。片手で開ける事が出来る故、手は繋ぎっ放しだった。呆気に取られた。狭苦しい廊下だと思っていたものが、襖の向こうには、枯山水の古庭が広がっていた。飛び石、砂利道、瓢箪池に獅子威し。そんな中で、あの無機質なコンベアーが数回曲折して伸びている。コンベアーに乗って、白昼の庭を進む。生垣が途中切れている箇所があつて、建物の内壁さもなければ近所の家並みでも見えるのかと思えば、向こうは青々しい草原が広がっていた。妙だ。如何に複雑に建物の中をコンベアーが張り巡り、他に類を見ない異空間を築こうとも、此処まで広大な草原を作る事は不可能だ。ア、小鳥や羽虫まで飛んでいる。微風が吹いているのか。草の葉が

波打って揺れていた。

「不可思議でしょう。あれは本物の草原なのです。室内に草原が作れるはずがないってお思いです？ そう、普通に考えたら無理。でも実は作れるの」

八八アン。読めたぞ。あれもまた映像なのだろう。構図を考えて撮られ、精緻に映し出された模造の風景なのだろう。

「マア、頭の回転がお早いこと。行ってみましようか？」

コンベアーが停まった。千鶴子に手を引かれ、コンベアーを外れ、庭に踏み入る。

砂利はみしみしと音を立てて、水が張られた瓢箪池にはゆうゆうと錦鯉が泳いでいた。獅子威しが鳴る。岩の上を飛んで、切れた生垣に歩み寄ると、何と妙な事だろう。柔らかな微風が生垣の向こうから此方に吹いてきて、千鶴子の垂れた髪を揺らすではないか。

「サア、貴方も」

手を引かれて、生垣から顔を出すと、確かに其処には草原が広がっていた。しかし葉の先に触れようとすると、忽ち指先が赤黒く染まって、緑が失われるのである。どの葉に触れても同じだった。隣で、千鶴子がんふふと晒った。

「嘘をついてしまいました。本物ではありません。精緻巧妙に造られた模造品なのです」

矢張りそうか。あまりに精妙に造られているものだから信じてしまいそうになった。だがこの奥行きは単なる映像ではあるまい。

「ホログラムでございますわ。突き刺すのではなく、上から優しく触れるように指を伸ばしてくださいな」

云われたとおりに草の葉を撫でると、それに合わせて草は葉を擡げて肯いた。

「ホログラムはある一定の動きにしか反応しません。それ以外の動きをすると、たちまち映像が乱れて、先ほどのような具合になってしまうのです」

物を視覚するには光が必要である。光を物体に反射させて、生ま

れた光の振幅を記録すれば写真になり、それに位相を加えれば、その物体を立体的に映し出す事が出来る。光は波であり、物体の位相を記録するには、その波長に合う、つまりは類似した波長の光源を当てる事が必要だ。光の山が重なると、基本の倍の振幅を持つ波となる。もし此れが山と谷だった場合は、互いに打ち消しあってどうにもならない。物体から反射した物体光と、光源の参照光を干渉させ、得られた縞が干渉縞である。干渉縞は格子状になっており、其処に参照光と同じ光を当てれば、格子の溝を透過して進む光の中に一部回折して折れ曲がった方向に進んでいく光がある。その光の方向は、記録したときの物体光と全く同じであり、つまり物体光が再生されると云う仕組みだ。と千鶴子は説明してくれたのだが、当の千鶴子が一番理解していないようで、きつとその説明もマニュアルに組み込まれているだけなのだろうと悟った。

最近の湯屋は手が込んでいるな。

「今の御時世、ホログラムやら3Dやらは、何処にでも在りますわ。幻想が現実に近い付いてきているのです」

草原に現れたるは映像だけではなかった。不規則な微風に、注ぐ陽光。日差しに指を戦がせれば、不思議と熱も感じた。此れも模造か、と問うた。模造です、と答えた。

「あまり詳しいところまでは聞かされていないの」と言葉を濁して、千鶴子は踵を返すと、そのまま来た道に戻った。庭に気を取られていて、反対側の壁にまで気が向かなかつた。コンベアーを挟んで向こうに家屋が聳えていた。在りし頃の日本家屋である。屋根瓦の向こうに日輪が覗いていた。縁側の奥は畳敷きの床の間になっていて、戸が数枚と戸棚に掛け軸、一方で幾分不釣合いな古いタイプのテレビが端に置かれている。千鶴子はコンベアーを飛び越すと、平屋の縁側に腰をかけて、ふわりと髪を浮かせ、何処から持ち出したのか、扇で首筋を煽ぎ出した。

誠に不可思議なところだな、と独りごちて、砂利を幾つか拾うと、瓢箪池に投げ込んでみた。すると、砂利の一つが錦鯉を通過して底

に落ちた。通過する間、錦鯉の鮮やかな紅白は釘で引つ掻いたように崩れ、錦鯉ではないものになって、砂利が底に落ちると、再び錦鯉に戻り、尾を掻いて優雅に泳いだ。

千鶴子を追って、縁側に腰掛けた。ついつい目的も忘れそうになる。風流であれば何でも良いのだと見も蓋もない思いさえ出てくるのだから困ったものだった。縁側の軋む板の上でも、ざらついた畳の上でも、たとえ真昼間でも、今此処で千鶴子を抱きたい欲にも駆られ、ついその細い肩に手を伸ばそうとした。千鶴子の瞳が此方を向いていて、それはとても冷ややかな眼差しである。すまない、と謝ると、一時煽ぐのを止めた扇が、また千鶴子の項を冷まし始めた。「貴方の話を聞かせて欲しいわ」

話せる事など何もない。空虚な人生なのだから。

「何かあるでしょう。家族の話とか」

家族か。懐かしい響きだ。長いこと自分からその言葉を遠ざけていた気がする。

「兄弟は？」
「いない。」

「ご両親は？」

それもまた思い出したくない言葉だったに違いない。父とはあの日以来、会っていない。あの日と云うのは、自分のアパートに訪れて、治療でもして貰えと父が口を滑らした日だ。あの時、自分は何を仕出かしたのだろう。気がついたら、掌が真っ赤だった。殺したのかも知れない。アア、そうだ、父を殺したのだ、此の手で。唯一の肉親である父親を。

「何か厭な思い出？」

思考を千鶴子の柔らかく落ち着いた声が分断した。

「また考え事してたじゃない」

アア、もしかしたら自分は父を殺したのかもしれない。此の手にそのような感触が残っている。

「物騒な話ね。でも、確かな記憶はないのでしょうか？」

そつだ。頭は依然朦朧としている。酒気を帯びたわけでもないのに、気持ちが生ついたまま下りてこない。もしかしたら、自分は夢の中を酔歩しているだけに過ぎないのではないか。ホログラムなんて嘘っぱちで、目の前のすべては幻想の賜物ではないのだろうか。とすれば、千鶴子。お前も。

「心配しないで。貴方は人を殺したりは出来ないもの。話していれば分かるわ」

千鶴子の指が頬を撫でてくれた。そうして貰うと安らぐ。横になつていいわよ。頭上から千鶴子の声であやされて、千鶴子の細い足に膝枕をしながら、横臥して、庭を眺めた。

母の顔を見た事がないのだ、と千鶴子の膝に打ち明けた。未だ自分が幼い頃に両親は別れて、自分は父親に引き取られた。別れた理由など聞きたくも無かった。母の記憶と云っても模糊としたものしかないし。母の膝の上で、こんな風に絵本を読み聞かせられたとかね。御伽噺だったなあ。声も憶えていないのだ。在るのは事象、否、感覚だけだ。それもとても朧気なものだから、何とも云えない。物心つくまで、母の存在すら不確かで、自分でも覚えて思い出そうとしなかったのですね。男二人の生活はそれはそれで満足していた。何にも恵まれていなかったが、最低限の生活は出来たのだから。学生じゃなくなると、父は家を出ると先ず云った。仕方なく、自分で住処を探して、移り住んだ。ぼろいアパートだったよ。駅まで遠くて、近くに店も何も無い。住宅街ばかりだ。それも皆幸せそうな親子が住んでいて。買出しに行くのも億劫、ごみを捨てに行くのも億劫。仕事に行くときだけ部屋を出る。自堕落な生活の始まりだよ。月に一度、父が様子を見に来た。次第にごみで埋まっていく部屋を掃除もしてくれなかつた。最初だけは。父は再婚しなかつた。何度か恋人と呼べそうな女と親しげに歩いているのを見たが、誰とも婚姻までには発展しなかつた。自分に恋人の存在を打ち明けたりもしないし、逆に恋人は出来ないのかと訊いて来る事も無かつた。父との間で、女性絡みの話をした記憶すらない。何故だか分かる。互

いに、女性と云えば先ず母の影を消し去る事が出来なかつたからだ。いつでもべつたりと母の影は二人の頭に引つ付いていた。何か吹っ切れる機会はないかと思つて、母を捜す事を思いついたのは、独り暮らしを始めて五、六年経つた頃だ。何処かで再婚して元気に暮らしている母の姿を見れば、此方の心持も少しは落ち着くかもしれない。父が教えてくれるはずもないと分かつていたから、自力で探した。なかなか見つからなくて、時間だけが過ぎて行つた。その間、何度か女性と関係を持つとした事もあつたが、どれもうまくはいかなかつた。何故だろう。怖かつたのかねえ。女性と云うものが。話をしていると、生きた心地がしなかつた。興味が無かつた訳ではないよ。むしろ、有り過ぎた。周囲はそれに気付くのも早くてね、忽ち声をかけられなくなつた。すると、矢張り自分は女性とは縁のない存在なのだと思うようになって来て、益々避けてしまふようになった。いよいよ自分が致命的に萎縮してしまふのだと自覚し始めた頃だ。何れも此のままでは欲情が爆発してしまふと懼れて、暴拳に出た。金の力を借りようと思つた。めぐの居る店、アア、他の湯屋の事だが、足を運んだ事があつたんだ。でも、満足に果てる事が出来なかつた。何が不満なの、と、足りないの、と、つい先ほど知り合つたばかりの女に瞳を潤ませて訊かれたりもした。恐らく、愛であろう、と答えると、じゃあこんな店来るんじゃないよと嘲笑われたよ。彼女の云う事も確かだつたが、足りないのが愛だと云うのも確かだつた。重要な女性からの愛が、自分には欠落していたのだと気がついたんだ。では一体全体、何故。母の存在……否、不在が起因している事は自明だつた。それから間もなくしてね、母の所在が掴めた。試しに、半ば捨て身の思いで、アパートの近所に在つた警察署に飛び込んだんだ。何か分かるかと思つて。署員は迷惑な顔をしていたが、色々と探してくれたようで、すぐ近くに居ると云う事が判つた。

「会いに行つたの？」

ウン。でも会う事は叶わなかつた。ソリヤアそうだろう。両親が

別れたのは随分前の話で、すでに戸籍は外してある。云ってみればもう自分と母は赤の他人さ。血の繋がりがあると云っても、親子と云う関係ではないし、そのつもりで会う事も出来ない。父の古い日記を自宅で探し当てて、母の名前を調べたから探す事は出来たけれども、実際会うまでには至らなかつたと云う訳さ。

「残念ね」

それが、それでもない。それがきっかけで、何だか楽になった。母が今何処で何をしているのかが判つただけでも、少し目の前の靄が晴れた気がして、探す意味はあつたんだと思うよ。

「なら良かったじゃない。大した進歩よ」
「アア。自分でもそう思う。」

日が翳ってきた。曇ってきたのではない。南国の空のように瑞々しかつた蒼穹が、次第に紅くなり始めていた。夕暮れよ、と千鶴子が呟いた。空は赤く燃え始め、やがて暗い夜が訪れた。草原の上空に月が傾いている。草木が騒ぎ始め、微風もやや強さを増して、冷たくなっていた。

「ナア、千鶴子よ。何でしょう。本当に自分は一度、此処に来た事があるのだろうか。お前とこうして過ごしたのだろうか。エエ、確かに、逢つておりますわ。だが、その記憶が薄いのだ。マア、忘れてしまったの？ いやいや、お前のような女を忘れる訳が無い。なら、どうして？ それが自分でも分からないのだよ。」

ふと千鶴子の膝に頭を預けたまま、生垣の向こうを見つめていると、昏闇に照らされる草原の頂に、何か丸い影がひょっこりと現れるのを見た。ちょうど月の暈に雲が掛かつて、月光が遮られた時だ。丸い影が草原の丘陵を転がってきた。思ったよりも大きい。距離が離れていたせいで、米粒のようにしか思わなかつた影が、次第に見上げるほどの大きさになった。生垣の傍まで来た時、月を隠していた雲が風に流されて、光が生垣に注がれ始めた。

ワツと、声を上げて、飛び起きようとしたが、千鶴子の掌が自分の頬谷を押さえてしまい、身動きが取れなくなつた。

「じつとして。大丈夫だから」

大丈夫な訳が無い。あんなものを見て驚かない者はいない。気が狂うのも致し方ない事だ。腕を退ける。あんなものを見せ付けるのか。

「大丈夫。じつとしていれば何もしいはずよ」

生垣に半分隠されているが、それは巨きな人の生首だった。男だ。生垣の向こうから卑しい二つの瞳が此方を見下ろしている。月光が生首を鮮明に映し出した。そのぎとぎとした髪の毛先も眉間の皺も、黄色くくすんだ白目も、耳の上つ面の部分にもさつと生えた産毛も、月の光に照らし出されて、此方を見下ろしていた。生首の眼が庭を見渡す。此方には目もくれようとしない。アア、そうか。分かったぞ。角度的に瓦屋根の陰になって縁側まで見通せないのだ。我ながら冷静な状況把握に北叟笑んだ直後の事であった。生首がごろんと横に倒れ込み、生垣の上空に覗いていた、生首の脛から上の部分が消えてしまった。ぱつと視線を下に向けて、一瞬で戦慄する。生垣の切れ込み、先ほどまで草原を覗かせていた切れ込みに、生首の眼がぎらぎらと光っていた。目をかっで見開き、すっかり視線に囚われてしまう。居ても立ってもいられず、千鶴子の腕を払い除けると、畳の敷かれた床の間に這い蹲って逃げた。少しでも奴から離れたい。その視線が届かぬ処まで。しかし、床の間から抜ける戸はどれも触れると、昼間の草の葉や錦鯉のように模様も質感も崩れてしまうのだった。

「囚われてはいけない。あれは幻よ。危害は加えないわ」

此方を、千鶴子は振り向いていた。彼女の背後、庭の端には、男の血走った眼が二つ。すると生垣を乗り越えるものがあった。朱く毒々しい色の舌だった。分厚く白い斑点の浮いた舌だった。舌は伸びてきて、足元の瓢箪池にぼしゃつと落ちた。水から出た舌の上に錦鯉が乗って、ぴちぴちと尾鰭と頭をばたつかせている。鞆を撞くかの如く、ぱおんぱおんと舌先で錦鯉を跳ねさすと、拳句の果てには丸め込んで、ぶしゅつと云う音を立てて錦鯉は潰れてしまった。

驚いて逃げる。床の間のテレビがばちんと点いて、男の生首が映った。又しても眼が合った。ウワツと悲鳴を上げて、床の間の隅に更に逃げ込む。

「目を覚まして。あんなのは此処には存在しないはずなの。ましてや錦鯉を」

千鶴子が叫んだと同時に舌が飛んできた。思わず目を瞑ると、耳がきゅつと云う短い悲鳴を拾った。恐る恐る瞼を開くと、千鶴子の細い身体が舌で絡め取られ、吊るし上げられていた。縁側にバスローブが脱ぎ散らかされている。気絶しているのか、千鶴子は腹を巻き込まれたまま、ぐったりとして動かなかった。助けなければ、と怯えていた身体が動いた。

ホログラムの映し出す幻影なのか、瘋癲回廊に巢食う鬼なのか。その正体は定かではない。だが、救い出さなければ千鶴子が殺される、と直感して、庭に飛び出した。足元の砂利を手当たり次第、見開いた男の双眸に投げつけた。ぐおんぐおん、と音を立てて、生首が怯んだ。ちょうど自分でも持ち上げられるほどの岩を担いで、生首の眉間に殴りかかる。血が噴き出た。舌に漲っていた力が緩まったのか、千鶴子の身体は解き放たれ、砂利に叩きつけられる既のところ、彼女の身体を受け止めた。

「早く、乗って」

千鶴子が呻いた。乗るとは、どう云う事だ。尋ねる間もなく、コンベアーが動き出した。千鶴子を担いで、コンベアーに辿り着いたが、痛みにも身を震わした生首が更に逆上して、肉布団の舌を波打たせ、躍り狂わせると、此方目掛けてぶち込んできた。避けた拍子に危うくコンベアーから振り落とされそうになったが、千鶴子の手が手首を握ってくれたお陰で平衡感覚を失わずに踏み止まる事が出来た。ベルトコンベアーは螺旋を描いて上昇していった。天へと通じる天女の軌道をなぞるが如く、平屋も古庭も見下ろしながら、草原を離れていく。生垣の傍で横たわった生首が伸びきった舌をしまつと、不気味な雄叫びを上げて、緑の丘陵の果てに背面で転がってい

くのが見えた。

安堵からか、全身の力が抜けて、千鶴子の胸に着地すると、ふくよかな枕も功を奏したのか、睡魔が意識を引きずっていき、まさに天にも昇る気持ちで、浅い眠りに落ちて行った。

夢を見ていた。

自分は今、軟らかな潤いの中を漂っている。蒼い混沌の世界。海だ。冷たいが、温かい。母の懐。母なる海だ。

異様に首の長い海亀が、目の前を横切って行った。此方を招くように胸鰭が動いていた。忽ち自分の身体も沈んでいく。海面を見れば、三日月が波に歪んでいて、数多の泡がその暈を覆っていた。

千鶴子は何処に行ったのだろうか。教えてくれるか、亀よ。

海亀は長い首を擡げて、水の中を滑っていく。肯いたようにも見えた。海亀の後を追おうと蹴伸びをした時、脚がそれ以上泳ぎ進めるのを食い止めるように急に動かなくなった。藻が、蔓が、海草が、幾重にも纏れ合って足首に絡みついていた。緑青の微生物が集まって形成したかのような、暗澹の砦が闘ぎ合って、今にもその草叢から別の何かが飛び出して来そうな気配でもあった。見る見る内に、海亀は遠ざかって行く。待つてくれ、と叫んだが、大量の呼気の泡しか出ず、代わりに塩辛い海水が肺を満たして行った。苦しみと遣る瀬なさで？きながら、海亀の向かう方を視た。

深海に無数の蛍火が瞬いている。虹色の海底潮流が逆巻いている。否、其々は崇高で神秘的な屑星と銀河の御姿であった。海亀は深海から、星の海へと泳ぎを進め、やがて太陽の火の海に消えて行った。置き去りにされた沈鬱は凪いで、何故だか救われたのだと云う気持ち站了起来。何の手懸りも無いのに、海亀は自分の犠牲になったのではないかと云う奇妙な納得さえ覚えた。

「起きてください」

波濤の唸りが耳を攻める。

「起きてくださいな」

深海魚の発声が耳を攻めている。

「起きてくださいな」

はっと気がついて目を覚ませば、そこに千鶴子が居た。アア、此処は何処だ。苦しくない。塩辛い。冷たくもない。暗くも無い、否、やけに暗い。くすりと千鶴子は笑った。

「夢でも見ていたのでしょうか」

その顔に、誰か別の女の面影が重なって、踏み板が外れたように呆気にとられた。誰だ、今は。まるで何処かで出逢った事のある女のような。思い出せない。アア、何故こつても大事な事を思い出せないのだろうか。何か大切な事を幾つも忘れていく気がする。千鶴子、お前は何も知らぬのか。知っていたら教えて欲しい。

「わたくしは貴方の事を何も存じませぬわ。此れから知るので。貴方の身体の隅々まで」

千鶴子の背後に部屋の全景が見えた。ベッド。段差で区切られ、部屋の端には、洗い場と、人工大理石で拵えたと思しき長方形の浴槽。

「ようこそ。湯浴み場へ。御背中を流しましょう」

アア。何だ。ハハハハ。何だか面白くなって腹を抱えて笑った。千鶴子はきょとんとしているが、きつと瘋癲回廊の名の如く、気が触れてしまったのだと思っているのだろう。アア、確かに自分でも何が可笑しくてこんなになんて笑えるのかが不思議でならない。狂ってしまったのか、遂に自分は狂ってしまったのか。

「馬鹿な真似はよして。さあ、洗い場へ」

千鶴子に背中を押された。アア、すまない。少し安心しきってしまったようだ。あのような化け物を目の当たりにするのは初めてであったから、すっかり自分は死んでしまったのかと思ひ込んでいたのだよ。

「マア、縁起でもない。サア、裸になって」

千鶴子に服を脱がされた。と云っても脱がせるようにせがんだの

は自分である。まるで幼子が母に頼むように、恥ずかしげも無く脱がせてくれ、一人では脱げぬと駄々を捏ねたのだ。自分が素っ裸になると、次は千鶴子の番だった。既にバスローブはなく、下着姿の千鶴子が居る。下着の縁に指をかけると、ペしりと手の甲を叩かれた。

「悪戯が過ぎますよ。まずは身体を洗ってから」

アア。と肯いて、浴場用の椅子に腰掛ける。股間の部分が女の二の腕が入る程の深さに刳り貫かれている、湯屋専用の椅子であった。腰を落ち着かせると、千鶴子は浴槽から湯を汲んだ。浴槽には既に丁度良い温度の微温湯が張っており、非常に仄かに湯気が立ち上っている。だが、すごく透明な湯だ。千鶴子は汲んだ湯で、全身くまなく優しく丁寧に洗ってくれた。泡立つ石鹸が、シャボン玉となつて辺りに浮いて去つた。全身を洗い流して、件の刳り貫かれた溝に手を突っ込めば、未だ泡に包まれぬ裸の某が千鶴子の掌に包まれた。優しく揉まれ、泡の感触と微温湯の温もりも相俟つて、一気に悦楽の域に飛ばされる。此の女には愛が有る。自分に対しての狂わぬ愛が有る。此れは仕事か、と問うた。すると、千鶴子はいいえ仕事ではございませぬと八重歯を覗かせた。愛が有るのか、と重ねて問うた。はい、紛れも無く此の感情は愛でございます。

泡を流して浴槽に浸かった。久方ぶりの風呂である気がする。身体に染み付いた汚れどころか、心中に積もった澱でさえ濯がれた気分だった。浴槽の脇に大窓があつて都会の夜景が望めた。篝火の如く、玄夜に燈影の燃ゆるビル街である。めぐの居た店にも浴槽の脇に小窓があつたが、擦り硝子で、且つ、窓外は隣のビル壁が数糎、離れて存在しているだけであつた。千鶴子が浴槽に入ってくる。才、と目の前を横切つた彼女の胸と陰毛を見つけて、思わず感嘆した。湯はいつの間にか濁り湯になっている。「ミルクのようでしょう。飲んでみたら如何」と千鶴子は云う。母の味がするかもしれないナア、と戯けた言を吐かしつつ、濁り湯が湯船に沈んだ千鶴子の裸体を巧妙に隠している事に気がついて、想像が否応にも掻き立て

られると、千鶴子の言動よりもその肉体にばかり意識が傾き始めていた。

すると、底の見通せない湯船の中で、股間に感触があった。触れているのは千鶴子の指先である。千鶴子はゆっくりと湯船に半分浮かした谷間をちらつかせて、此方に擦り寄ってきた。裸体が被さる湯を挟んで、千鶴子の裸の、くびれも突起も、弾力も手触りも肌で感じる。依然として、千鶴子の指は某を介抱しつつ、弄んでいた。

鋭く勃ち上がった某の先端を親指で優しく擦ってみたり、掌全体で包んできゅっきゅっと捻ってみたり、実に手馴れたものだ。重力の失った下半身は、千鶴子の細い腕でも軽々と抱きかかえられた。湯船の水面に寝そべるような形で倒れ、濁り湯の滴を纏った自分の下半身が露になる。千鶴子は屹立し、びくびくと引き攣っている某に舌を這わせて、濁り湯を舐め取った。ミルクの味がするか、と問うと、「未だしないわ。わたくしの知っているミルクの味は酷く生臭くて苦いの」と洒落っぽく云う。そのあどけなさも又好ましい。某に、千鶴子の舌の動きを感じては、暇になった両腕で水面に波を立てた。此の生々しく湿った音は、水面の音か、某を啜える千鶴子の動きと、某の神経から伝わる快い感触と、どちらにも同調している。そんなに動かしてくれるな。否、もっと素早く力強くしておくれ。歯に当たって痛みが走ろうとも嬉しく思った。すっかり自分は此の女の虜になってしまい、癡癡回廊でしか出逢えない事を思うと何と哀れなことだと嘆く。千鶴子の口が竿を離れ、隠囊を吸う。腰の中の鈍痛。もう駄目だ、堪えきれない、と唸った。

「あまり長湯をすると上せてしまいますわね。上がりましょう」
浴槽から立つ千鶴子の身体を羽交い絞めにして担ぎ上げた。「まあ。強引ね」そのまま傍らのベッドに運んで、千鶴子の上に覆い被さる。愛している。と初めて感情を口にした。

「わたくしも……」

唇を重ね、舌を纏れさせて吸い合った。唾液を共有し、もうこれ以上啄ばむものがないのに、それ以上のものを貪るような接吻をし

た。左手の掌が、千鶴子の乳房を掴んでいた。アアン、と千鶴子の喉から声が洩れる。口を乳房に移すと、千鶴子は既に身を捧げてくられていて、思う存分、肉欲の消化に尽くす事が出来た。腋の肉から下膨れまで揉みしだく。ぽつんと乗った乳首とその周囲を舌で焦らして、次いで右手を千鶴子の無防備な股に伸ばした。水気の消えぬ茂みの中に、異なつた潤いを持つ褌が指先に触れた。熱い。火傷しそつだ。優しく触れると、千鶴子は唇を噛んで、喘ぐ。指を挿れると身を悶えて悦ぶ。一連を繰り返していく内に、褌の奥の秘め室はどんどん拡がっていき、褌と穴がぱくぱくひくひくと鳴き始めた。千鶴子は乳房に添えられた左手首を掴んで来るなり、甘美な口調、ふくよかな唇、淫靡な眦、魅惑の流し目で、「欲しいの」と誘つた。某の準備は出来ていたが、未だ幾許の不安が残る。

「大丈夫。一緒にいけるわ。今夜なら、絶対」
アア、お前の云うとおりだ。

千鶴子の脹脛を持ち上げて股を大仰に開くと、花卉が此方を向いて爛々と咲いていた。透明な液が滴っていて、軽く糸を紡いでいる。某を掴むと、その花卉に擦り付けて、様子を探つた。亀頭が吸い込まれていく。深い千鶴子の懐に先端が収まり、柔和な感触で彼女の褌と内部は某を受け入れてくれた。

激しく、突いた。何時ぞやのめぐと云う女を思い出した。此のような感触だったか。女と云うものは。ふと、別の女を抱いた覚えが急に呼び戻される。誰だ。貴奴は。何処の女だ。「太郎さん」と女は呼ぶ。「パパ」と女の子の声。駄目だ。ほかの事は考えるな。今は腰を動かす事にだけ集中するのだ。千鶴子を愛する事だけに。先端を伝つて、快感が骨盤を駆け上る。海が蘇ってくる。泳ぐ亀。深みに嵌っていく。草叢の中へ、深淵の中へ。現れるは、竜宮の御殿。綺羅とした外装。招く、踊り子。その先に待つ、羽衣を纏いし美女は誰だろう。衣の裾を開き、現れる花卉。差し伸べる氷雪のような手。羽衣が融け、現れたるは湯浴み場の褥に仰向けになる千鶴子の艶美な裸身。もう少しだ。もう少しで絶頂を迎える。千鶴子の身体

を抱き寄せた。座った体勢で繋がったまま、上下に動いた。更に密着する。締め付けられる。圧迫感、千鶴子の重み。「ちつとはましに生きてみようと思わないのか」父の声。「穢れた遺伝だな」アア、もう辞めてくれ。穢れてなんかいない。穢れているのはお前の方だ。自分は確かあの時そう叫んで、父に飛び掛った。流しには今し方朝餉の仕度をしようと思つた父が出した出刃包丁があつた。それを自分は奪つて、抵抗する父の足を無残にも切りつけたのだ。止められなかつた。衝動が、意識を占領していたのだ。なあ、千鶴子。お前は間違つているのだよ。自分は実の父を殺したのだ。

千鶴子の豊満な乳房に顔を埋めながら云つた。頭上から、いいえと声がした。

「貴方はお父様を殺していない。絶対に殺していないわ」
どうしてそう云えるのだ。

ダツテ、貴方の心がそう云っているのだもの。
心が読めるのか。

イエエ。読めはしない。分かるの。

ソウカ。自分には分からない。千鶴子、お前の気持ちはおろか自分の考えている事すら分からないのだよ。

「仕方ないわ。厭な思い出を、人は忘れるの。防衛本能と云うものよ。でも思い出は消えない。何を悔やんだって、罪は罪だもの。それでもね、人は成長するの。貴方は本能に抗つて、今こうして罪を償いに來たではありませんか」

何の事を云っているのだ。
「癒してあげるのよ、貴方を。そうして貴方を哀しませる罪を洗い流すの」

罪とは何だ。何の事なのだ。自分の心はお前に、何を語つていと云うのだ。

「貴方は悪くない。悪いのは、あの男。娘さんを犯した、あの男なのよ」

快感が続く。尚も自分は未だ絶頂を知らずに居る。千鶴子の重みだけを下半身に感じながら、千鶴子の子宮を激しく突いていた。

「あの女の子。貴方の娘さんだったのね」

あの女の子？ まさかあの書店員が自分の娘だと？ 何を莫迦な事を。未だ自分は結婚すらしていないじゃないか。だのに娘だなんて。それもあんな年頃の。「太郎さん」「パパ」二人の声が聞こえる。誰なんだ、お前たちは。何故、名前と呼ぶ。何故、パパと呼ぶ。「何処で知り合ったの？」

アア、出所して直ぐだ。新聞屋で働いていた時の同僚だった。己の唇が勝手に動いた。そんな莫迦な事があつてたまるか。自分はまだ二十代駆け出しのアルバイターで……。浴槽の窓に、自分と千鶴子の姿が反射していた。夜景は消え、薄暗がりの中に裸の男女。艶々とした若い素肌を持ち、黒髪を振り乱す女。その女を抱えるように、白髪が乱れ、深い皺が頬に刻まれた、初老の男が坐して此方を向いているのである。

「貴方はお父様を刺したけれど、傷害にしか至らなかった。それでも、貴方は七年間、刑務所で過ごした。貴方は動転してた。まるで今のように。懐かしいわね。あの頃の貴方は未だ若かった」

最初に瘋癲回廊に訪れたのは何年前の事だっただろう。随分前だ。なのに、千鶴子どうしてお前はちっとも老けていないのだ。

「出てから、貴方は家庭を持った。家族を持ったのよ」

家庭？ 家族？ 要らない。そんなものは自分には別世界のものだ。

「一人娘。名前は？」

母の名前であり、初めて抱いた女の本名でもあり、お前の名前でもある。

「そう、千鶴子」

千鶴子は、娘の千鶴子は、たかだか本を床に落としたぐらいで犯されて身籠った。浴槽で事切れているのを見つけたのは、妻だった。自分も妻もそんな事があつたなんて知らなかった。店のイメージが

悪くなると、店側が隠匿していたのだ。信じられないだろう。日常にそんな事が罷り通るだなんて。でも、実際の話なのだよ。口止めされて娘も語らなかつた。自分の目にも妻の目にも、就職しだして直ぐだったから、娘が部屋に閉じ籠って日に日に元気を失っていくのも、色々とストレスが溜まってきたのだろうとばかり思っていた。なのに……。半狂乱になった妻が連絡を寄越して、直ぐに自宅に戻って、自らの血で汚れた千鶴子を見た。なんでこんな事になった……。妻は知らなかつた。でも、きつと勤め先で何かあつたのよ。そう震える声を聞いて、家を飛び出した。娘の勤め先に怒鳴り込んで事の顛末を漸く聞いた。応対した指導係の女が気に食わなくて、ぶん殴つたよ。女の前歯が飛んで、女は血の気を失つた顔に、歯茎から滴る血を手で押さえながら、狂つたように悲鳴を上げた。何故だか、店は強姦魔の所在を知っていた。よく本を予約していて、宅配のデータがあつたらしい。しかし、住所までは教えてくれなかつた。指導係の女がプライベート云々で、断固として拒否したのだ。だから、殴つた。店を出て、父の一件で刑務所に入っていたとき、契約を結んでいた宅配業者の倉庫に。今、思えば何故、服役囚にそんな仕事を預けられるのか誠に不可思議だが。関係者への謝恩参りと偽って忍び込んで、データベースで強姦魔の名前を調べると、直ぐに出て来た。奴の家に行くと、居た。奴は捕まってさえも居なかつたのだ。マア、店が隠匿して、監視カメラの映像も処分していたのだから当然だ。一軒家なのに昔自分が住んでいたアパートに似ていた。狭苦しくて、ごみで散らかっている。奴は自室で寝ていた。ぐうぐうと鼾をかいて眠っていた。自宅には他の家族は居ないよう、浴室の窓から忍び込み、眠っている奴の首元に。包丁を突き立てたんだよ。

アアウン。千鶴子が、喘いだ。勢い余って、更に激しく膾を突いてしまったらしい。

「それから？」

奴の首を切り取つたんだ。惨たらしいと思うだろう。なんで、そ

んな事したかつて？ サアネ。奴の首を世間に晒す為ではないのか。公開処刑と云う奴さ。駅前に繰り出そうと決め込んでいた。男の首を、街頭インタビューをしていたテレビカメラの前に突き出して見せた。生放送だったんだ。男の生首がね、茶の間のテレビに映し出されたんだよ。その時ばかりは自分の顔を撮られても怖気づかなかった。不思議だろう。狂っているだろう。そうだ、元から狂っていたんだよ。妻もその後、身を隠して何処かへ消えてしまった。あれから十年経ったんだね。

「そして、またここに来たのね」

アア。瘋癲回廊。狂人の巢。鬼の住処。

ドウダ、当たっているか。此が現実だろう。自分にとっての現実などそんなものなんだ。初めから狂っているんだ。

「だからこそ癒しが必要だったのでしょうに」

アア、そうだ。お前の。

んふふ。

何が可笑しい。

未だ貴方の狂気なんて、可愛いもんだってことよ。

「瘋癲回廊、進めば地獄。行き着く部屋は鬼の棲み処。そうよ、此処は鬼の棲み処」

膝の上で、女体が悶えた。

顔を埋めた女の胸が空気が抜けたように急に萎縮して、何やら生臭い異臭を発し始めた。皮の張りもなくなっていく。

骨が浮き、肉が融ける。

「罪を悔い改めますか。それとも、人間やめますか？ ねえ、貴方わたくしと一緒にになりたいのでしょう。一緒になりましょう。絶頂の果てに行きましょうよ。そうしたら、もっと楽になるじゃない。

んふふ」

「お前は、何者だ」

囚われていた。腐肉の乳房と、骨の浮き出た二の腕で、首の根を

押さえられていた。

谷間の小さな隙間から、女の黒髪と顎が見えた。輪郭から臭い肉脂と、乾いた皮膚の滓がぼとぼと落ちてくる。女の眼は蕩けていた。鼻も既に無い。唇が端で千切れ、鞆のように揺れていた。

腐乱した女の顔が、融けた谷間から此方を覗き込んでいた。

「わたくし？ 千鶴子よ」

鶴は千年、亀は万年。白鶴は千年生きるの。

女の腐乱体を振りほどき、ベッドから飛び退いた。ベッドの上で、千鶴子と名乗る女は、仰向けになって、辛うじて生肉の残った下半身を猥らに開閉させながら、んふふふ、んふふふと笑い続けている。

「ようこそ、瘋癲回廊へ」

女の骸の手が、己の股に伸び、指先が褰を擦った。

花卉が開き、その奥の暗黒に、湯浴み場のすべてが吸い込まれていく。

大理石の浴槽も、奇妙な形をした椅子も、鏡の窓も濁り湯も、渦となって吸い込まれる。

喘ぐ声が、掠れていく。

徐々に頬骨、鎖骨、二の腕、太腿と順に骨が見え始め、肉と云う肉、皮と云う皮、神経と筋肉と云う其々が、埃と煙を巻き上げて、ベッドと共に消滅していく。

千鶴子の名残は、艶の失った黒髪だけだった。

股を大仰に広げた体勢をとって残された、白骨の亡骸が最期には砂になった。

壁際に一枚の扉が在った。最後の扉である。それを開いたとき、外界は眩い光で満たされていて、思わず目を瞑った。耳元で、出ろ、と男の声がした。次いで、もう戻ってくるなよと背中を押される。

気がつけば、白亜の精神病院の前に突っ立っていた。右手の空に陽が照っている。蒼穹にかかる雲は穏やかに流れて、塀の傍に植わった桜の木から、桃色の桜吹雪が風に乗って揺らめいていた。春だと真つ先に思った。門のところに杖をついた老人が待っていた。足を引きずりながら、此方に歩み寄ってくる。随分と痩せ衰え、あの頃の面影は無い。

突然、背後から鋭い悲鳴が聞こえて、振り向くと、東棟の屋上に揺れる人影が見えた。トレーナーの裾で額を拭う。あちらは確か女性棟だったはずだ。女が大手を振って、其処からゆらりと前屈みになって、落ちた。地に落ちる衝撃は此方にも伝わってきて、ぱつと己の身を支える髓にはかりは残っていたはずの、女を抱いた感触も儂く消え失せた。絶頂し切れなかった後悔は無い。落ちた女が誰かは分かっていた。未だ生後半年も経たぬ赤子だった自分の性器を啜えたり、扱いたり、生まれた間もなくから男として弄び、父を激怒させた女。此の病院に入れられ、数年前、今のように屋上から身を投げて死んだ女……。屋上から飛び降りた影は地面に当たる寸前で掻き消え、代わりに忌々しい狂人の表情が中空に浮かんで、それもまた消えた。成長したのですよ、と狂人の口が動いたようにも見えた。愛は有つたのだろうか。今、こうして嘗ての夫と息子の目の前で、死後も狂気を見せつけながら、彼女は何を思うのだろうか。父の足を犠牲にした事は悪いと思っている。罪は償い切れないとも思っている。だが、もう狂気には頼らない。自分の身体も、流石にがたが来ていようだ。再び此処に来る事を望んではない。だから、さようなら。瘋癲回廊。我が、母の子宮。けれども、最期の餞としてこれだけは忘れずに云って置きたかった。

最初から、人生を棒に振るつもりなんて無かったんだ、ぼくは。貴女に逢いたかっただけなんだ。

おかあさん。

了

(後書き)

感想・評価お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3146q/>

『瘋癲回廊』

2011年5月24日23時40分発行